

釜川右俣～ヤド沢 2015/08/15-16

メンバー：落合（CL）、齋藤（SL）、迫（食担）、飯野（食担）

釜川の存在を知ったのは日本百名谷だったと思う、苗場の北面にこんな深い溪が刻まれているとは意外だったが、釜川は三大峡谷のひとつ、清津峡（清津川）の最大支流であり、田代の七ツ釜伝説しかり、そこに沢登りの舞台が整っているのはもはや必然の出来事だったのかもしれない。

苗場の沢は我々にとって初見参で、山域の特徴や雰囲気を取っても未知な部分が多く、前々から気になっていたルートである。

百名谷の釜川右俣は千倉沢をツメ上げるが、今回は支流のヤド沢を遡り、小松原小屋に出るルートを選択した。（釜川の本流は左俣・倉俣沢でより困難なゴルジュで形成されている）

今年の夏、特に8月上旬は記録的な暑さが続き関東では猛暑日の連続日数更新が続くなど例年以上の暑さであった。（梅雨明け後、平日は毎日猛暑続きで仕事をしながら沢に行きてえ～！と思う日々が何日続いたことか、）

しかし、お盆休みに入ると天気は長続きせず前日は湯沢で60ミリ、津南で30ミリ程度の局地的雨量を観測したので入溪の際、増水が唯一の懸念だった。

前夜は越後田沢駅でSB、無人駅だが駅舎も新しく近くには居酒屋やコンビニもあり、毎回寝酒を楽しむにきている？メンバーにとっては誘惑がいっぱい、初めての土地なので色んな意味で新鮮だ。

◆8/15（土）曇りのち晴れ

ゲート前駐車場 6：30 三ツ釜 9：30 1,200m 幕営地 15：00

出発の朝、津南高原からみる苗場北面の山々は平凡な山並みで、お世辞にもこの奥地にあんな深い溪が刻まれているとは思えない雰囲気である。（その後、みんなそのギャップにヤラしたのは言うまでもない）予報では新潟は朝雨だったが、天気は期待通り回復傾向。

ゲートからは思いの他結構沢へ降りて、取水口から入溪。津南高原は釜川の水で潤っている事を実感。序盤の巨岩帯は激流で水流沿いには進めずほぼ左岸沿いを歩く。

重い荷物でゴーロ歩きは疲れるが、こんな水流でほんとに遡行出来るのか疑問に思ったが、ゴーロを抜けて最初の二俣に入る頃には平水となり一安心。

前半は飛び込みから泳ぎ対岸の岩に取りついたり、深い瀬の泳ぎなどフローティング・ロープが活躍し、夏休み気分を十分に満喫する。滝も多く、沢登りの要素が多分にあり飽きさせない。



フォローは楽チンの泳ぎ、

今年は色々な状況で泳いでみたが、ザックを背負っての泳ぎは単純な水泳技術とはまた一味違う。



泳ぎやゴルジュを抜けると、この先にいかにも“何か”待ち構えていそうな雰囲気だ。



三ツ釜下部にて

三ツ釜でぶなの会の三人組とお会いしたが、彼らは千倉沢を遡行して行きこちらも出だしから釜やナメが多く明るい雰囲気です。遡行価値が高そうだった。

中段テラスからみる三ツ釜はそれまた圧巻で昼寝でもしたい雰囲気のところだが、休憩も程々に三ツ釜の絶景に浸りながら我々はヤド沢に入る。

ヤド沢に入ってもハイライトと呼べる滝が多く、大滝の登攀、高巻きが終わると癒し系の流れに変わり、遡行もいよいよ終盤に差し掛かってきたことを実感する。

遡行図によると幕営地はヤド沢上部に多いと聞いていたが、全く適地が無かったのと釣りに夢中になってしまい、時間も遅くなってしまったので最初の候補地 1,200m 付近に戻り幕営。

薪集めに時間が掛かるので釣りは程々に切り上げ、前日の雨で焚火もシケ気味と思って試しに手持ちのマグナムをブツ放してみたが威力が凄すぎて危険だということが分かった。。（ちなみに遡行中、アブの洗礼は全く大したことなかった）

岩魚も晩御飯のつまみ程度は何とか釣り上げ、ネギ・ベーコン串、具沢山のそうめんを頂きました。

夜はウイスキーをボトル1本近く一人で空けていた齋藤さんが例のごとく？暴走、「溪とは何か？」を熱く語っていたが結論は「酒」だったので、みんな納得しつつ話半分で聞いていたり。。

夜は森の中から星がキレイに見えて、明け方はそこそこに冷え込んだが、酒の力を借りてみんなグッスリ眠っていた。



50m 滝でテンカラを降る筆者、あたりは？（左）、ネギベーコン串と岩魚塩焼きで酒が進む（右）

◆8/16（日）晴れのち曇り

幕営地 6：55 小松原小屋 9：10 小松原登山口 10：45 ゲート前駐車場 12：30

釜川は上流で国有林の林道が横断しているので探検的要素という意味ではやや趣に欠けるが、林道からエスケープしてしまうと味気ない上、これを逃すとまず行く機会はないであろうと源頭部の小松原湿原をもって遡行終了とする。

地形図のイメージでは湿原から爽やかに稜線に飛び出るとかと思っていたら、ヤブ漕ぎもほとんどなく突然小松原小屋の前に出てしまい拍子抜け。（実際の稜線はさらに上にあるが、土地勘の無いルートでの地図読みはこの先どうなっているのか分からない所が多く面白い部分である）

ヤド沢上部では釣りで坊主を食らった齋藤さんが、岩魚を手づかみで挑戦していたがあと一步で取り逃す惜しい場面もあった。

登山道に出るまで水が途絶えることは無かったので、小松原湿原が持つ保水力が水量が多い釜川の大きな要因となっているのだろう。



小松原湿原は苗場の頂上湿原程の規模は無いが、全く引けを取らない。
最後は花を愛でながら、遭遇したのは蛇とマムシだけで結局誰とも会わず。。

このひとけの無さや木道の痛み具合など、

苗場山の人気ルートからは隔絶された感じが、いかにも岳人らしい雰囲気で一興でした。

今回は与えられた役割に限らず、各々の場面で各自が持てる力を発揮してくれて合宿としては成功だったと言える。参加されたメンバーの皆さん、お疲れさまでした。

※釜川右俣～ヤド沢は、水量が多く泳ぎがあるのでベスト・シーズンは盛夏の1カ月程度と比較的短い。幕営地は1,200m 右岸から枝沢が出合う手前が絶好のポイントで他に適地は見当たらなかった。魚影は各地で散見されたが、絶対数は多くなく嗜む程度に留めたい。

滝の高巻きは比較的踏み後が薄く、場所によっては傾斜がかなり強いが灌木が多いので腕力で突破出来る所が多かった。

下部は増水に耐えられる幕営地やエスケープも無いので荒天の可能性のある場合は入渓を慎んだほうがいだろう。

(記録：落合)